

# 紀伊民報

## 診察室の午後

白浜はまゆう病院  
泌尿器科部長 川嶋 秀紀

その患者さんは、90歳を過ぎて前立腺がんを診断された。とてもお元氣な方で、娘さんの住む米国にもよく行かれていた。

患者さんの前立腺がんは、周囲のリンパ節に転移していたが、骨には転移していなかった。がんが前立腺の中だけに留まっていたので、根治的な放射線治療の対象ではなく、また年齢やがんの進み具合から判断して根治手術の適応でもなかった。ご本人とご家族に説明して、飲み薬と月1回の注射によるホルモン療法が開始された。

患者さんは、小柄で端正な顔立ちをされ、診察室で

の会話から穏やかで高尚なお人柄がうかがえた。普段は息子さんが付き添って来られていたが、娘さんが、婦国の折に病状を聞きに当

### <26> 100歳の前立腺がん

時私が勤めていた大学病院に来られたこともあった。数年が過ぎたころ、前立腺がんが再燃してきた。一般に、手術などでがんを完全に取り除く治療後に、がんがぶり返す事を「再発」、ホルモン療法などでがんを小さくしたり、進行を止めたりしていたのが、抑えきれなくなつて悪化していく

たので、ステロイドホルモンを内服する治療に切り替えたところ、再び前立腺がんはおとなしくなってきた。

こうやって外来診療を続けている間に、時は流れ、患者さんは100歳になつた。そのころには、患者さんが、待合室で居眠りをしていることも多くなつた

が、診察室での「いかがですか？」の問いかけには、「元氣にしています。」といったもの変わりない返答が返ってきた。

100歳になつてしばらくして、息子さんが、「父は最近元氣がなく、大学病院への通院も難しくなってきました。入所しているホームの担当医師に今後の診療をお願いしたいので紹介状を書いてほしい」と依頼された。私は、時間をかけて、長い経過の診療内容を手紙に書き、引き続き内服が必要な薬の処方をお願いした。その患者さんが通院されなくなつて、3カ月もたつたなかつたと思う。ご家族から、眠るよつに亡くなった旨、連絡が入った。前立腺がんの進行は抑えられたまま、天寿を全うされたのである。この方の主治医であったことに感謝するとも誇りに思っている。